

奇矯なジェントルマン

阿部菜穂子

昨春、初めての英語の本を英米など英語圏の国で出したところ、さざ波のように反響が広がり、筆者を驚かせると同時に楽しめている。

この本は、二〇世紀の初めに日本の桜を英国や欧州に紹介した英國人園芸家、コリングウッド・イングラム（一八八〇—一九八二）の生涯をまとめたもので、「Cherry, Ingram: The Englishman Who Saved Japan's Blossoms」（「チエリー・イングラム——日本の桜を救ったイギリス人」）との題名でベンギン社から昨年三月に出版された。その三年前に日本で岩波書店から出版し、日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した同名の本を、新しい材料を入れて英語で全面的に書き直した。

世界中で愛されている桜を一〇〇年前に西洋社会に根づかせる、という大きな業績を残したにもかかわらず、無名だった園芸家に光を当てたことが新鮮だったらしく、

本は出版直前に権威あるBBCラジオ4で「今週の本（Book of the Week）」として一週間、毎朝一五分ずつ朗読された。その後、エコノミスト誌や米ワシントン・ポスト紙など英米の主要各紙誌に大きな書評や記事が次々と掲載されたことで、イングラムの桜の物語は大勢の人々に知られることになった。

イングラムは明治、大正、昭和期に三度訪日し、日本から桜の種木を持ち帰って英國ケント州ベネンドン村の自宅の庭に植樹。桜のコレクションは最盛期には一三〇品種にのぼった。イングラムは、近代化路線をまっしぐらに走り、軍國主義への道を歩んでいた当時の日本で、多数の伝統の桜が消滅していたことに危機感を持ち、「桜の多様性」、ひいては社会の多様性を大切にするよう、日本人に強い警告を発していた。イングラムの桜を追う足跡は、実は日英の近代史の中でも、重大な意味を持つて

いたのである。

知られざる業績が明らかになつたことで、過去に埋もれていた園芸家は英國社会でいっきに「偉大な人物」となり、注目された。

誰よりも驚き、喜んだのは、イングラムの人々だった。イングラムは大英帝国最盛期の英國で新興富裕層の家庭に生まれたため、生きるために働く必要のない、特權階級にあつた。当時、上流階級のジェントルマンの中には、時間と金をふんだんに使って自分の興味のある分野の研究に打ち込み、業績をあげた人が少なくなかつた。自己流のやり方で調査・研究を進め、頑固に信念を曲げない。他人に対しては簡単には打ち解けないが、自身が情熱をかけること（イングラムの場合は桜）に少しでも興味を示す人には親切に接し、目を輝かせて会話をする。イングラムはこの種のエキセントリックなジェントルマンの一人であつた。

従つて彼は、家族の間では「人間よりも桜に興味のある、変わったおじいちゃん」と受け止められていた。しかし、この「偏屈なおじいちゃん」への評価は、本の出版後に一八〇度転換。筆者は孫やひ孫ら多数の親族から、イングラムを見直したという感謝の手紙やメールをもらつた。取材に応じてくれた多くの人からも「このような

素晴らしい人物にかかわることができ、とても誇りに思う」との手紙を受け取つた。筆者への講演やメディアの取材依頼は、今も続いている。

最近、英國東部サフォーク州に住むジェイソン・ゲイソン・ハーディと名乗る人から連絡があつた。「自分は、一九世紀の終わりにペニンドン村に住み、イングラム邸を建てた初代クランブルック伯爵の子孫である。あなたの本を読んで、かつてのクランブルック家とイングラム家の絆が明らかになり、感激している。記念にこの春、桜を十数本自家の庭園に植えたい。ぜひ植樹に来てくれないか」というのである。初代伯爵は、ペニンドン村のパトロンとして多くの慈善事業を行い、村の発展に大いに貢献した。ゲイソン氏は「イングラム家との関係を復活し、コリングウッド・イングラムが残した資料の展示会も開催したい」と情熱たっぷりに話した。

かくして、筆者はイングラムの孫夫妻と一緒に、未來の第六代クランブルック伯爵の広大な邸宅に招かれ、桜の植樹をすることになった。聞けばゲイソン氏は、地球環境問題に危機感を持ち、安全な食べ物や農業のあり方の研究に打ち込んでいるという。どうやら、氏も上流階級のエキセントリックなジェントルマンタイプ。驚いたことに、英國にはこの種の人物がいまだに存在するのである。